

# 『告白録』における confessio の意味の考察

ムン          ジョン ホ  
文          禎 顯

## 1. はじめに

アウグスティヌスの confessio に関する研究において、主に取り扱われるアウグスティヌスの著作は『告白録』と『詩篇注解』である。旧約聖書の詩篇に深く関わっているこの二つの著作を一貫するモチーフは confessio であり<sup>(1)</sup>、この confessio は一般的に二重的意味をもつといわれる。confessio の二重的意味というのは、一つは confessio peccati (罪の告白) で、もう一つは confessio laudis (讃美の告白) である<sup>(2)</sup>。それは特に『詩篇注解』で多くの箇所でも明確に表れる。「二重の告白がある。罪の告白か讃美の告白である<sup>(3)</sup>。」「罪の告白はすべての人が知っているが、讃美の告白には少数の人が注意を払っている<sup>(4)</sup>。」

元来「告白する」「白状する」「認める」などの原義をもつ confiteri と confessio<sup>(5)</sup> は法廷用語である。confiteri は被告人が自分の罪などを認めることを意味し、confessio は被告人の白状を意味する。つまり confessio という語は、古代ラテン世界において裁判官の前で強制されて自分の罪を白状する場合に用いられていて、「讃美」のような宗教的意味は全くもっていなかったということである。この confiteri という動詞と一致するギリシア語は εξομολόγισθαι であるが (confessio は εξομολόγησις に当たる)、この語は confiteri の場合のように一般に罪を公に認め、白状するという意味だけで使われていた。ところがギリシャ語の七十人訳と新約聖書においてはじめて、このギリシャ語は「告白する」を超えて「讃美する」「感謝する」という意味で使用されるようになったのである。このように新しい意味が付け加えられたのは、εξομολόγισθαι が「告白する」と「褒める、称賛する、讃美する」という意味をもつヘブライ語の הודה (hodah) に適合し、影響されたからだといわれる。したがって confessio peccati と confessio laudis、つまり confessio の二重的意味という新しい概念

(1) 山田 晶『アウグスティヌスの根本問題』, 創文社, 1977, 4 頁の注 3.

(2) M. Wundt, Augustins Konfessionen, *Zeitschrift für die neutestamentliche Wissenschaft und die Kunde der älteren Kirche* (22), Giessen: Alfred Töpelmann, 1923, p.165.

(3) *Enarrationes in Psalmos* 29II,19.

(4) *Ibid.*, 137,2.

(5) A. Solignac, *Les Confessions* (Bibliothèque Augustinienne 13-14), Paris: Desclée de Bouwer, 1962, p.11.

は、ヘブライ語の聖書からギリシャ語訳の聖書に、ギリシャ語訳の聖書からラテン語訳の聖書に翻訳する過程の中で引き受けられ、さらにラテン語を使う古代キリスト教会で使われるようになったのではないかと考えられる。アウグスティヌスが『詩篇注解』と『告白録』の執筆において用いた旧約聖書の『詩篇』が七十人訳のラテン語訳であることを考慮するなら、我々はアウグスティヌスがこのラテン語の聖書から影響を受けていたことを推測するのは難しくない。その上アウグスティヌスはその聖書から影響を受けた古代教会の伝統に触れ、それを学び取ったことをも否定できないであろう。

一方この二つの告白と共に欠かせないのが *confessio fidei*（信仰の告白）である。迫害時代に古代キリスト教会のキリスト者たちは、裁判官の前で殉教を覚悟してまでイエスキリストを信じることを告白した。*Confessio fidei* はこのような歴史的背景を通して形成されたが、このことについてテルトゥリアヌスやキプリアヌスを通して証言されている。この *Confessio fidei* の特徴というのは公で自分がキリスト者であることを表明すること、つまり A. Solignac が指摘したように、言葉によって、キリストと教会とに密接につながっている生の誠実さにしたがって、自分がキリスト者であることを外的に証明するものだということにある。*confessio fidei* の伝統は当然アウグスティヌスの時代においてもすでに知られていたが、アウグスティヌスの『告白録』において、この *confessio fidei* が認められるかどうかは、研究者たちによって議論されているところである。

このような *confessio* の歴史的背景を念頭に置きながら、本研究はアウグスティヌスの『告白録』における *confessio* の意味を解釈することを試みる。特に『告白録』の *confessio* が *confessio peccati*、*confessio laudis*、*confessio fidei* の意味を受けているのかどうかについて、そしてそれらの意味が一つの告白としてどのようにつながっているのかについて解明していきたい。便宜上本論においては *confessio peccati* は CP、*confessio laudis* は CL、*confessio fidei* は CF に表記する。

## 2. 先行研究と研究方法

アウグスティヌスは『詩編注解』で表したように、『告白録』では一つの *confessio* の中に CP と CL の意味があることを明確に表現していないため、『告白録』の中に二重的意味が含まれること自体を否定する M. Wundt のような研究者もいる<sup>(6)</sup>。しかし多くの研究者は、『告白録』においてもその二重的意味を認めている。ところが二重

(6) Cf., M. Wundt, op. cit., pp.164-166.

的意味を認める研究において、目立つ論点といえば、CF が『告白録』の confessio の中に重要な意味として含まれているのかどうかという問題である。

まず confessio において CP と CL とを主要な意味とみなす一方、CF の意味づけについては消極的で否定的な立場をとるのは、山田晶<sup>(7)</sup>、宮谷宣史<sup>(8)</sup>、J.J. O'Donnell<sup>(9)</sup>、A. Solignac<sup>(10)</sup>、P. Verheijen<sup>(11)</sup>、J. Ratzinger<sup>(12)</sup> などである。それに対して confessio における CF の意味を認め、強調する研究者は G. N. Knauer<sup>(13)</sup>、P. Courcelle<sup>(14)</sup> である。

confessio の意味に関するこれらの研究者の議論を考察した結果として、次のように二つの問題が浮き彫りになる。一つは CF を否定する場合、P. Courcelle の見解からすると『告白録』において否定できない CF の特徴が無視されることになるという問題である。もう一つは、CF を肯定する場合、CP、CL、CF が一つの confessio としてどのように結び付けられているのかが不明であるという問題である。本研究はこのような問題意識をもって、研究方法を次のように示しておく。

第一、従来の多くの研究において示されているように、『告白録』の confessio の中に CP と CL の意味が含まれており、特に人間の罪を赦し、救いをもたらした神の恩寵によって、この二つは一つの confessio としてつながっているという立場をとる。

第二、迫害時代の裁判官の前に立って自分の信仰を告白した殉教者たちの CF のように、殉教につながるアウグスティヌスの CF は『告白録』においては考えられないが、公で言葉をもって自分の信仰を外的に表す行為としての CF は認めざるを得ないという見解を支持する。

第三、もし殉教につながらなくても、人々に向けて言葉で自分の信仰を表明することを CF として認めることができるなら、『告白録』の confessio には CP、CL、CF の意味が存在するということであるであろう。するとこの三つは『告白録』においてアウグスティヌスの一つの confessio の行為としてつながっているということを前提にしなければならない。

第四、この三つの意味を一つの confessio として捉える際、CP と CL とは人間の内側に向けられたものであり、CF は外側に向けられたものであるといえるであろう。そして CP と CL においても前者は自分に向けられ、後者は神に向けられているとい

(7) 山田晶, 前掲書, 3-26 頁。

(8) 宮谷宣史「アウグスティヌス『告白録』の解釈について(1)」『神学研究』第 22 号, 関西学院大学神学部編, 1974, 140-144 頁。

(9) J. J. O'Donnell, *Augustine: Confessions II*, Oxford: Clarendon Press, 1972, pp.3-7

(10) Cf. A. Solignac, op. cit., pp.11-12.

(11) M. Verheijen, *Eloquentia Pedisequa: observations sur le style des confessions de St. Augustin*, Nijmegen, Nijmegen: Dekker & Van de Vegt, 1949, pp.69-71, 81.

(12) J. Ratzinger, Originalität und Überlieferung in Augustins Begriff der Confessio, *Revue des études augustiniennes* (Vol.3), 1957, pp.384-392.

(13) G. N. Knauer, *Psalmenzitate in Augustins Konfessionen*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1955, pp.78-79.

(14) P. Courcelle, *Recherches sur les Confessions de Saint Augustin*, Paris: Éditions E. de Boccard, 1950, pp.13-20.

える。だとすれば三つからなる一つの confessio は弁証法的に理解されなければならないことになる。

第五、本研究は三つからなる一つの confessio が、『告白録』における confessio と confiteri の用例に制約されるものではなく、『告白録』というタイトルが示唆するように、『告白録』全体に関わるテーマとして理解する。

このような研究方法にしたがって、アウグスティヌスの『告白録』における confessio の意味を考察していく。

### 3. 内なる告白と外なる告白

アウグスティヌスは第1～9巻において過去の自分について告白した後、現在の自分について告白する第10巻の冒頭で自分の confessio が神と人間に向けられていることを明かす。「見てください、まことに、あなたは真理を愛したのです。それ以来真理を行う者は光のところに来ます。私は自分の心においてあなたの前では私の告白によって、ところが多くの人々の証人の前では私の筆（文字）によって、真理を行うことを願います」（X,1,1）。第10巻のほかの箇所でも同じことを次のように述べる。「どうか教えてください、何の益のため依然として神の前で人々に文字を通して告白するのでしょうか（X,3,4）。」このようにアウグスティヌスは、神の御前で心の confessio を通して真理を行い、それを筆によって人々に伝えようとする。

ここで彼の告白の二重的構造が明確になる。つまり一つの confessio に、心において神に向けられる側面と心の外側の人々に向けられる側面があるということである。この二つの側面をそれぞれ内なる告白と外なる告白といえるであろう。神に向けられた内なる告白は一方では沈黙の中で行われるが（X,2,2）、他方では魂の言葉と思惟の叫びによって（X,2,2）行われる。それに対して人々に向けられた外なる告白は、上記で述べたように、文字（X,3,4）を通して伝えられる。

するとアウグスティヌスは沈黙の中で魂の言葉と思惟の叫びで内なる告白を行おうとする際、その目的は何であろうか。そのことについて彼は第10巻1章1節において次のように述べている。「私を知っている方よ、私はあなたを知りたいです。それも私が知られているようにあなたを知りたいです。私の魂の力よ、あなたが私の魂をしみもしわもなく所有するように、私の魂の中へ入り、それをあなたにふさわしくして下さい。これが私の希望です。」しみもしわもなく神が魂を所有することを希望するということは完全な魂になることへの願望であり、神に自分の魂が知られているように神を知ることが完全な神認識への願望であろう。この完全な魂への願望と完全な神認識への願望とがアウグスティヌスの内なる告白の目指すところなので

ある。しかし『告白録』において二つの願望は成就されない。ただ不完全な魂の状態を意味する悪の問題と、それにもかかわらずその悪から完全な認識を求めて神に近づこうとする善の問題が長らく語られているのである。アウグスティヌスはこのことについては第 10 巻で、「私の悪と私の善」(X,4,5)、「悪い時と敬虔な時」(X,2,2)、「神に近づくことが遅れていることと神に近づくこと」(X,4,5)などで表現している。アウグスティヌスが『再考録』II.6.1において「13 巻からなる『告白録』が自分の悪についても善についても義と善の神を讃美する」と語った際、この悪と善というのも、不完全な魂の状態を表す悪の問題とその悪から神に近づこうとする善の問題を意味するであろう。このようにアウグスティヌスは完全な魂への願望と完全な神認識への願望をもって、自分の悪と善の問題について沈黙の中で魂の言葉と思惟の叫びで内なる告白を行うが、それと同時にこの内なる告白を筆をもって外なる告白として人々に伝えようとする。

アウグスティヌスはなぜ神の前で行う内なる告白を、同時に多くの証人の前で行う外なる告白としても伝えようとするだろうか。その理由はまずアウグスティヌスは完全な魂と完全な神認識への願望、自分の悪と善の問題について読む読者たちが、自分の悪について共に悲しみ、自分の善については共に喜ぶように、そして神の香炉である彼らの心から出る賛歌と悲嘆が、自分のための祈りになって神の御前に立ち昇り、それが自分に対する神の憐れみにつながるようにという意図があるからである(X,4,5)。またなぜ内なる告白を外なる告白として表そうとしたかという、読者たちも神の憐れみに対する愛の中で、神の恵みに対する喜びの中で目覚めて、その恵みによって強くなるようにという意図もあるからである(X,3,4)。弱い者が目覚め、強くなるということはどのような意味をもつであろうか。それはアウグスティヌスのみならず、『告白録』の読者たちが彼らの思いを神に対してかき立てて「主は偉大で、まことに讃美するに値します」(XI,1,1)と神を讃えるまで信仰深くなることを意味する。『再考録』ではアウグスティヌスの告白が思いだけではなく、人間の知性をもかきたてるという。「…また(13 巻からなる『告白録』)は神に向かって人間の知性と思いをかきたてます<sup>(15)</sup>。」外なる告白において読者たちの思いと知性が神に向かってかき立てられるように意図されたことは、アウグスティヌス自身の内なる告白の目指すところである完全な魂と完全な神認識への希望と同じような方向に向けられているように見える。

要するに *confessio* には神の前で行われる内なる告白と人びとの前で行われる外なる告白という二つの側面があること、そしてアウグスティヌスが完全な魂と完全な神

(15) *Retractationes* II, 6, 1.

認識を求めて魂の言葉と思惟の叫びで行う内なる告白を外なる告白として表そうとするのは、多くの証人の前で行われることによって、その confessio を聞く彼らの心から生じる賛歌と悲嘆がアウグスティヌスのための祈りになるように、さらに彼らの思いと知性も神に向かってせき立てられるようにという意図のためだということ、また内なる告白と外なる告白が神に対する思いと知性の高揚という同様の方向に向けられているということである。

特に多くの証人の前で行われる外なる告白は、迫害時代において法廷でイエスキリストを告白することによって殉教に至った CF のようなものではない。しかし迫害時代のそれではなくても、公で信仰を表すことを CF とみなす P. Courcelle の主張が受け入れられるならば、多くの人々の前で自分の信仰を表し、それを聞く彼らの信仰的行為を通して自分も信仰的に助けられ、さらに彼らにも信仰的にいい影響を及ぼそうとする意図をもっているという意味で、この外なる告白は、CF として捉えてもよからう。外なる告白を CF として理解する場合、するとアウグスティヌスの confessio において二つの重要な要素として知られてきた CP と CL の意味はどのように見出すことができるであろうか。次の章において内なる告白についてより詳しく論じる中でこの問題に取り組むことにする。

## 4. 内なる告白の二重構造

内なる告白は、前章で述べたように、アウグスティヌス自身の悪と善、悪い時と敬虔な時、神に近づくことが遅れていることと神に近づくことに関するものである。ここでアウグスティヌスにとって悪とは自分が不敬虔で神から離れていること (abs te) と関わり、善とは自分が敬虔で神に近づくこと (ad te) と関わるということがわかる。『告白録』において confessio は 23 回、confiteri 91 回、全部あわせて 114 回の用例<sup>(16)</sup> が表れるが、これらの用例を見ても、大きく自分の過去と現在の不敬虔さや神から離れている状態を表す悪に関する部分と、自分の敬虔さや神に近づいている姿を描く善に関する部分とに分けられる。

悪について告白する際、それは悪を行う主体である自分に方向付けられ、善について告白する際、それは善の対象である神に方向付けられているといえるであろう。すると悪の confessio において自分に方向付けられていることと、善の confessio において神に方向付けられていることはどのように捉えたらよからうか。この問題を解明するためには、『告白録』における重要な二つの問い、すなわち「自己とは何者か」と

(16) R. H. Cooper (ed.), *Concordantia in libros XIII confessionum S. Aurelii Augustini : a concordance to the Skutella* (1969), Hildesheim : G. Olms, 1991, pp.173-175.

「神とは何者か」という二つの根本的問いの意義について述べる必要がある。「あなたは私にとって如何なる存在でしょうか・・・私はあなたにとって如何なる存在でしょうか。」(I,5,5)

この二つの問いにおける自己と神への探求の願望は、回心直後に書かれたカッシキアクムの対話編の『ソリロキア』にも表れる。「永遠に同一である神よ、私は私を知り、あなたを知りたいです<sup>(17)</sup>。」「『ソリロキア』における自己と神に対する知的探求の願望は、自らを顧み、自らを通して真理そのものを求める理性としての精神の問いである<sup>(18)</sup>。そしてこの知的探求の願望は、カッシキアクム対話篇以来、アウグスティヌスの一貫したテーマとして見なされる<sup>(19)</sup>。また宮谷宣史は、アウグスティヌスの生においてこの二つの問いとして表れる探求の結果が『告白録』であると強調する<sup>(20)</sup>。実際アウグスティヌスは『告白録』全体において「自己とは何者か」、「神とは何者か」という問いに従って、自己と神に向かっていく。このような二つの問いの意味からすると、悪の *confessio* において自己に方向づけられていることと、善の *confessio* において神に方向づけられていることとは、それぞれ「自己とは何者か」という問いと「神とは何者か」という問いを通して説明されと考えられる。

すると自己に方向づけられていること神に方向づけられていること、自己に向かっていくことと神に向かっていくこととは具体的にどのような意味であろうか。アウグスティヌスにとって自己に向かっていくこととは、自己の心に帰ることであり(IV,12,18)、自己の心に帰ることは、降りることである(IV,12,19)。すると降りることとは何であろうか。それは涙の谷で泣くことであり(IV,12,19)、心が碎かれ、懺悔することである(V,3,3)。さらに自己に向かっていくことは、心の中で過去と現在の個々の罪のため懺悔するにとどまらず、自己の内面にある悪と罪と墮落の根源にまで向かっていくことをも含む。アウグスティヌスは第1～9巻において過去の様々な悪について述べながら、悪の根源である悪しき意志にまで至る。第10巻においては様々な罪の根っことしての三つの欲<sup>(21)</sup>にまで下る。そして第11～13巻においては『創世記』冒頭の解釈を通して時間の本質や「無形相的質料」などについて論じながら、墮落そのものを意味する人間内面の淵<sup>(22)</sup>(*abyssus*)にまで入っていく。

それに対して神に向かっていくことは、存在の根源である神に上昇していくことである。神への上昇はまず心の中に入ることを前提にし(VII,10,16)、そのため罪から救って下さった神の恩寵に感謝し、讃美しながら、その心の中から人間の魂の上に存

(17) *Soliloquia* II,1,1 ; I,2,7.

(18) K. リーゼンフーバー著・村井則夫他訳『中世哲学の源流』, 創文社, 1995, 164 頁.

(19) 岡野昌雄『アウグスティヌス『告白』の哲学』, 創文社, 1997, 19 頁.

(20) 宮谷宣史『アウグスティヌス』, 講談社, 1986, 160-161 頁.

(21) ヨハネの手紙第一 2:16

(22) *Confessiones* XIII,7,8 ; XIII,8,9 ; XIII,10,11 ; XIII,14,15 ; XIII,21,30.

在する不変の光を魂の目で見えて (VII,10,16)、神を見つけることを意味する (IV,12,19)。たとえばミラノでの魂の上昇 (VII,17,23)、オスティアでの魂の上昇 (IX,10,23 – IX,10,25)、記憶探求を通した魂の上昇 (X,6,8 ~ X10,26,37)、聖書の観想を通した魂の上昇 (XIII,18,23) などが挙げられる。

神への上昇において特に重要なのは、認識の働きである。神への上昇の段階は主に自己の外側にある万物に対する認識、自己（肉体と魂）に対する認識、神に対する認識の順に上がるが、その各段階において「神とは何者なのか」について正しく認識すること、言い換えれば神が創造者であると正しく把握することは核心的部分である。このことは第10巻の次の魂の上昇の過程において明らかになる。「神は何者なのか」(X,6,9) というアウグスティヌスの問いに対して、人間の外側にあるあらゆる被造物は、自分たちが神ではなく、自分たちを創った方であると答える。こうして「神が何者なのか」という問いをもって段階的に上昇していくのである。ここでこの問いに対する答え、つまり認識を働かせることによって得た答えというのは、神は創造者であるということである。神が創造者であるという被造物の答えを、アウグスティヌスは神に対する被造物の讃美として表現する (X,6,8)。これはあらゆる被造物が実際神を創造者として告白し、神を讃美するというのではなく、アウグスティヌス自身が被造物を通して「神が何者なのか」と問うていく中で、神があらゆる被造物の創造者であるという認識に至り、その認識が同時に創造者に対するアウグスティヌスの讃美を引き起こしたことになるのである。

認識が讃美につながることにについて、アウグスティヌスは第1巻1章1節においてより明確に述べている。彼は最初讃美への願望を表すことから『告白録』をはじめ。「主よ、あなたは偉大であり、まことに讃美するに値する方です。あなたの力は大きく、あなたの知恵は計り知れません。そしてあなたの被造物の一部分である人間はあなたを讃美することを欲します。」。讃美への願望を表した後、彼は讃美に至る諸過程を明確にする。荒井洋一の図式を借りれば次のとおりである。

【信の系列】①神の呼びかけ (uocare) → ②宣べ伝えること (praedicare) → ③信じること (credere in) → ④呼び求めること (inuocare) →

【知の系列】⑤たずねること (quaerere) → ⑥見出すこと (inuenire) → ⑦讃えること (laudare)<sup>(23)</sup>。

この図式からすると信の系列 (①～④) から知の系列 (⑤～⑦) に移動し、そして知の系列においてたずねることと見出すことを経て讃美に至ることが分かる。この讃美は罪の赦しと救いのため神に感謝し、神を讃える、『告白録』でよく表れる一般的

(23) 荒井洋一『アウグスティヌスの探究構造』、創文社、1997、37-77頁。



な讃美というより、たずねることと見出すこと、すなわち問いと認識を通して獲得できるものように見える。これは善の *confessio* において神認識によって神に対する讃美が達成されるということを意味するが、このような思想は、『詩篇注解』第 99 編 16 節においても示唆されている。その箇所ではアウグスティヌスは神に対する観想によって存在し続ける天使たちが居住する天では CP はなく、神が創造者であり、人間が被造物であることを永遠に告白する CL しか存在しない<sup>(24)</sup> と語っているが、これは神認識と神の讃美と不可分離的關係にあることを示すものであろう。

以上この章において、悪の *confessio* と善の *confessio* について論じた。悪の *confessio* は自分に方向づけられ、自分に向かっていくことであること、そしてそれは自分の心に入って、過去と現在の罪のため懺悔し、さらに悪と罪と墮落の根源に下ることを意味すると述べた。それに対して善の *confessio* は神に方向付けられ、神に向かっていくことであり、それは心の中で魂が認識の働きを通して不変の光である神に上昇して、完全な神讃美に至ろうとする意味があると説明した。このように悪の根源に向かっていく悪の *confessio* を CP として、魂の神への上昇において「神は創造者だ」という認識が「神は創造者だ」という讃美に変わる善の *confessio* を CL として理解することは可能ではないであろうか。

## 5. 二つなる一つの内的告白

悪の *confessio* と善の *confessio*、つまり心によって悪の根源に至る CP と心の中で善の根源である神に上昇していく CL は、一見異なる方向を示し、断絶しているように見える。この両者をどのように捉えればよからうか。アウグスティヌスが『真の宗教』第 39 章 72 節において明確に示しているように、この両者を内的自己への還帰と神への上昇として理解するのが妥当であろう。「外に出ていくことを欲するな。あなた自身の内に帰れ。内的人間の中に真理は住んでいる。そしてあなたの可変的本性を見出すなら、あなた自身をも越えなさい。… 理性の光そのものがとどかれるところへ向かいなさい。すべての善なる理性的者は真理以外の何にたどり着くであろうか。」ここで内的自己への還帰と不変の光である神への上昇は、二つなる一つの動きとして表れるが、『告白録』の CP と CL も内的自己への還帰と神への上昇という二つなる一つの動きとして捉えられる。つまり CP と CL とは、神へ昇るために自己の中へ降りる (IV, 12, 19 *Descendite, ut ascendatis*) 二つなる一つの動きであるということである。それが内的告白の意味を正確に表している。このように CP と CL の降

(24) *Enarrationes in Psalmos* 99.16.

下と上昇の根源的つながりを主張する本研究の見解は、自分の罪深さを認めることが、神の恩寵を認め、神にのみ栄光を帰することを意味するということによって、CP と CL のつながりと統一性を主張する J.Ratzinger の見解<sup>(25)</sup> に比べるとより立体的に表現しているといえるかもしれない。

降下と上昇の構造をもち、究極的には完全な認識による真の讃美を求めるこの内なる告白は、創造の時から人間の内側に植えつけられている ad te（あなたに向けて）の行為と非常に密接に関連付けられていると考える。「人間が喜んであなたを讃美するようにあなたはかきたてます。なぜならあなたがわたしたちをあなたに向けて（ad te）造られたからです。そのためわたしたちの心はあなたのうちに安らぐまでは不安です。」(I,1,1) この箇所において罪から救って下さった神を讃美する行為が存在する以前、被造物として創造者を讃美すべき原初的な行為は、ad te の存在として造られた人間存在の中に植えつけられた存在的課題であることが明らかになる。内なる告白が魂の言葉と思惟の叫びによって究極的に目指すところも神讃美であり、ad te の存在として造られた人間が神讃美を存在的課題としているということは、内なる告白と ad te の人間存在の行為とは、異なるものではないことを示す。つまり内なる告白は、ad te の人間存在が自身の存在的課題としている正にその行為ではないかということである。だとすれば、内なる告白の意味は、ad te の意味を解明することによって、より明確になるであろう。内なる告白として理解される ad te は『告白録』においてどのような意味をもつであろうか。『告白録』において最もその意味が明らかになるのは、アウグスティヌスの時間的 *conversio*（回心）と、始原における形而上学的 *conversio* とにおいてである。

第8巻でアウグスティヌスは自己の *conversio*（回心）について「あなたは実に私をあなたに向けて回心させてくださったのです」(VII,12,30. *convertisti enim me ad te*) と述べる。ad te の存在として造られた人間が、この世で墮落の状態からやっと神に向けて（ad te）回心を成したというのは、一体何を意味するであろうか。J. Guittou はこの *conversio* をただ一つの完全な創造の運動である<sup>(26)</sup> というが、*conversio* につながる ad te は、この創造の運動として理解されるであろう。つまり ad te は、闇から光になり (VIII,10,22.)、別のものになっていく (VIII,11,25.) 存在形成運動として捉えられるということである。ad te の行為が存在形成運動の意味をもつというのは、始原における「靈的被造物」の *conversio* を通しても明らかになる。

アウグスティヌスは第13巻において「靈的被造物」が始原において淵、すなわち

(25) Cf. J.Ratzinger, op. cit., pp.386-387.

(26) J. Guittou, *Le Temps et l'Éternité chez Plotin et Saint Augustin*, Librairie Philosophique J. Vrin, 1933, pp. 136-138.

「無形相的質料」(materia informis) の状態から神に向けて *conversio* を行い、神の光に照らされて光として形成されたことについて述べる (XIII,2,3)。これは、「靈的被造物」の形而上学的な *ad te* の行為を、淵のような無形相的状态から光の存在へ変貌する存在形成運動として表している。時間を超えて行われる第 13 巻のこの「靈的被造物」の *conversio* は、上記で述べた、時間の中で行われる第 8 巻の人間の *conversio* とは関連付けられない別の次元の行為のように見えるかもしれない。しかしアウグスティヌスは、人間の魂も「靈的被造物」であることを指摘しながら、時間における人間の墮落した状態を暗い淵と見なし、時間の中でもその淵から不変の光である神に身を向きかえることによって光の存在になることを創世記冒頭の解釈を通して繰り返して強調する。これは時間的 *ad te* と形而上学的 *ad te* が、創造における存在的課題、つまり最初から「靈的被造物」の中に規定された一つの存在形成運動として理解されなければならないことを意味するであろう。したがって内なる告白が *ad te* の行為と関連付けられる際、我々は内なる告白を、CP と CL、内なる自己への還帰と神への上昇という構造としてのみならず、*ad te* の存在形成運動の表れとしても理解しなければならないのである。

このような解釈が妥当であるなら、告白者が自己の心の中の悪の根源に下り、またその心から善の根源である神へ上昇していき、その結果として光の存在 (完全な魂) に変えられ、完全な神認識と究極的神讃美に至るようになるというアウグスティヌスの思想は、『告白録』全体を貫くアウグスティヌスの内なる告白の意味を明確に表しているといえるであろう。またアウグスティヌスは『告白録』においてこのような内なる告白を自分の *ad te* の存在形成運動として行うと同時に、それを外なる告白として読者たちの前で表すことによって、彼らも *ad te* の存在形成運動に参加し、光の存在として生きる生を選ぶように招いているといえるであろう。

## 6. むすび

以上のように、我々は最初七十人訳のラテン語聖書に表れ、古代キリスト教会において使われていた *confessio peccati* と *confessio laudis*、そして迫害時代以来その概念が定まるようになった *confessio fidei* が、アウグスティヌスの『告白録』において受け継がれているのか、そしてそうであるなら、その三つの *confessio* がどのような意味をもち、どのような形でつながっているのかについて考察してみた。その結論として次のようにまとめることができる。

まずアウグスティヌスの *confessio* は、内なる告白と外なる告白という二つの側面として表れる。内なる告白は完全な魂と完全な神認識を求めて神の御前で魂の言葉と

思惟の叫びで行われる行為であるに対して、外なる告白は人々の前で筆で行われる行為である。ところがアウグスティヌスは内なる告白を外なる告白として表すことによって、それを読む多くの人々の心から生じる賛歌と悲嘆が彼のための祈りになり、彼らの思いと知性も自分と同じく神に向かってかき立てられ、完全な魂と完全な神認識を希望するようにする意図をもっていたと考えられる。多くの読者たちの前で信仰の事柄を表し、また彼らを信仰の完成へ導こうとするこの外なる告白は、迫害時代のそれと一致するものではないとしても、アウグスティヌス自身の *confessio fidei* として表れている。

内なる告白も二重構造をもって表現される。一つは悪の *confessio* であり、もう一つは善の *confessio* である。悪の告白は自分に向かっていく行為として、自分の心に入り、過去と現在の罪のため懺悔し、さらに悪と罪と墮落の根源に下ることを意味する。反面善の *confessio* は神に向かっていく行為として、心の中で魂が認識をもって不変の光である神に上昇し、完全な認識の中で完全な神讃美を成就しようとするものである。このように悪の根源に向かっていく悪の *confessio* を *confessio peccati* として、神への上昇において「神は創造者である」という認識が「神は創造者である」という讃美につながる善の *confessio* を *confessio laudis* として理解することが可能である。

内なる告白における悪の *confessio* と善の *confessio*、すなわち *confessio peccati* と *confessio laudis* は、『真の宗教』で示されたように、内なる自己への還帰と神への上昇という二つなる一つの運動として捉えられる。さらにこの二つなる一つの運動は、暗い淵の状態から不変の光である神に向かって *conversio* を行うことによって、光の存在になる *ad te* の存在形成運動として理解される。アウグスティヌスはこのような意味をもつ内なる告白を、外なる告白として人々の前で表し、それによって彼らにも内なる告白の素晴らしさに気付き、それに参加するように招いているのである。

今まで論じてきた、『告白録』における三つからなる一つの *confessio* の意味は、従来の研究が示していない新しい発見であるといってもよからう。そして内と外、下降と上昇という形が取り入れられ、さらに *ad te* の存在形成運動というダイナミックな意味が加えられることによって、より独創的に発展された『告白録』におけるアウグスティヌスの *confessio* 思想は、J. Ratzinger の指摘のように<sup>(27)</sup>、*confessio* に関する思弁的深さが欠けていた当時の西方教会の領域においてその不十分な部分を満たす役割をしていたと考える。

---

(27) Cf. J. Ratzinger, op. cit., p.384.